

星見八犬傳

第五輯

卷四

~ 13  
709  
24



門遠 13  
誦 709  
卷 24



明治二十六年  
十月九日  
購本

南總里見八犬傳第五輯卷之四

東都 曲亭主人編次

第四十七回

莊助三つび道節を試せ  
雙玉交其主は還休

單節の四鼓の左側を還らぬ坊を迎へんとく。と精悍しく蕉火をゆり照しつ  
走りゆくを音音ハ恍忙呼ひく。まは俟ぬ甲夜をまら。とあをせを半遣り難に  
今さう邁るとあはる。あや吾侪を邁くべされ駐りぬと声高きふ戸口小立  
招けども天結陰りく路暗く其処とも判を松の火も忽地をえはあうらひと  
顔は歎息あつ。懐然として立在をかくあやねあふされば母屋へ退れ入りぬ  
とく右宵の安うら。あつとく。この山里も落著し去歳の秋は于蘭盆  
あり道策さふぞもあありく戦段をん子共のゐぬ人々の菩提よとく田文の

茂林の地藏菩薩へ燈明をまつるは大願を成せり日として懈る事かたし  
 黄昏毎に彼処におたぬかあそび寂しくて不覚に四下の人を尋ねてあつたよ  
 らぬ草原路を飯らぬ奴もゆく妹も厭ひぬ現あちの誠なる孝順貞實の  
 同胞とも生れなす人の妻とありけりかどてやいそ薄命あるが子共あを  
 一雙の夫婦と人は譽れ目ん暇もあはれ一夜契りもあはれ生死の海とも山とも  
 今宵まで夫の信せぬの産靈の愆状生れなすふ山里の賤婦かたしあはれ人  
 職おれども親三世武家は生れけり物ひと引提しるもあつたに昼八番山は新  
 撫に夜八林切り馬の履らつて夢の一年半夢中もあはれぬ良人をのみ只あつた  
 あくあはれ歎けの霧は袖の雨音おたてを氣あけ小俣は吾侪を慰ふ心の中の  
 痛あはれまといき口説き又口説けり獨り泣き壁背は支音を添ふ蟋蟀夜は深として  
 哀れしそひなきふわさるる志を激して頭を擡ぐ涙を飲り意おれぬ愚癡

あり歎け歎けとて益あらあふ心もたれ雨箇の媳婦が今や還ると縁頼にさる  
 懶に折屈し足りて撈る草履を引穿て後々面へゆく且く立在む折る大川莊助  
 義任ハ心當ある麓の白屋是首次彼首次とを尋ねあふ北向の窓より燈  
 火の甲夜過らふお鎖ぬ諸折戸は立よりて呼門入らんとけり程は音音はやく透らす  
 ぞ何処へと邁ゆと呼咎るをええりて否己ハ行客に卒介物問へん邊は音音と  
 小老女の宿所を知らぬ誨てと問ひえりけりお騒ぐ宵を鎮めてさう氣かく音音ハ吾  
 侪はゆるる何処より来ませりやと再問へば款げん原來をかくてゆ欵某ハ武蔵あり  
 同行四人の旅人ありあるは同道の一人或は憑れておへ届進らるる書翰一封  
 齎せしを囊に白井のあやしく不慮の闘諍は側杖打れて各々乱走してたれがその  
 支達お後れらるるさばれ今宵この処は宿を扱れりゆりゆり跡を慕わくまつるこ  
 ころ先よさるる人の詣来しとのひとと他事かく問はれ頭を傾け否さるる人あはれ

来き武蔵と火のあかき音耗を俟し侍れどもこの状かく詮わたり  
又をいふを隈なく索ねく書状を齎せし人々を伴て復来更りとふ且沈吟  
しての趣あり侍れども甲夜過る天を暗し山路小索迷んありあを侍必  
わすし要時想しぬと請れて強顔推辞もゆせ草鞋を脱措て母屋  
入りく休ひ火と回答し駈て案内を尋ね侍助のやうなうかぬ後まつり  
随は縁類ありものほり地炕の邊に坐を占むる音音の燈益掻起して莊助をつ  
つと髪薄く色白く骨坐高て年尚若うり當下竊はめやうこの人狼ハ  
髪れれども両刀を身帯れば必武士の浪人あらんやうなうかぬ  
さへ心ハ貌ふねばあを敵ごの間謀者執斬く量知りこし試しとん  
むとけり氣かく汲出せ晩茶の二柄抄馳走態してさへやうり如く片山里小  
幽け煙を立侍れハ翌の炊の備も家の内かものも今朝かきも還り侍れ

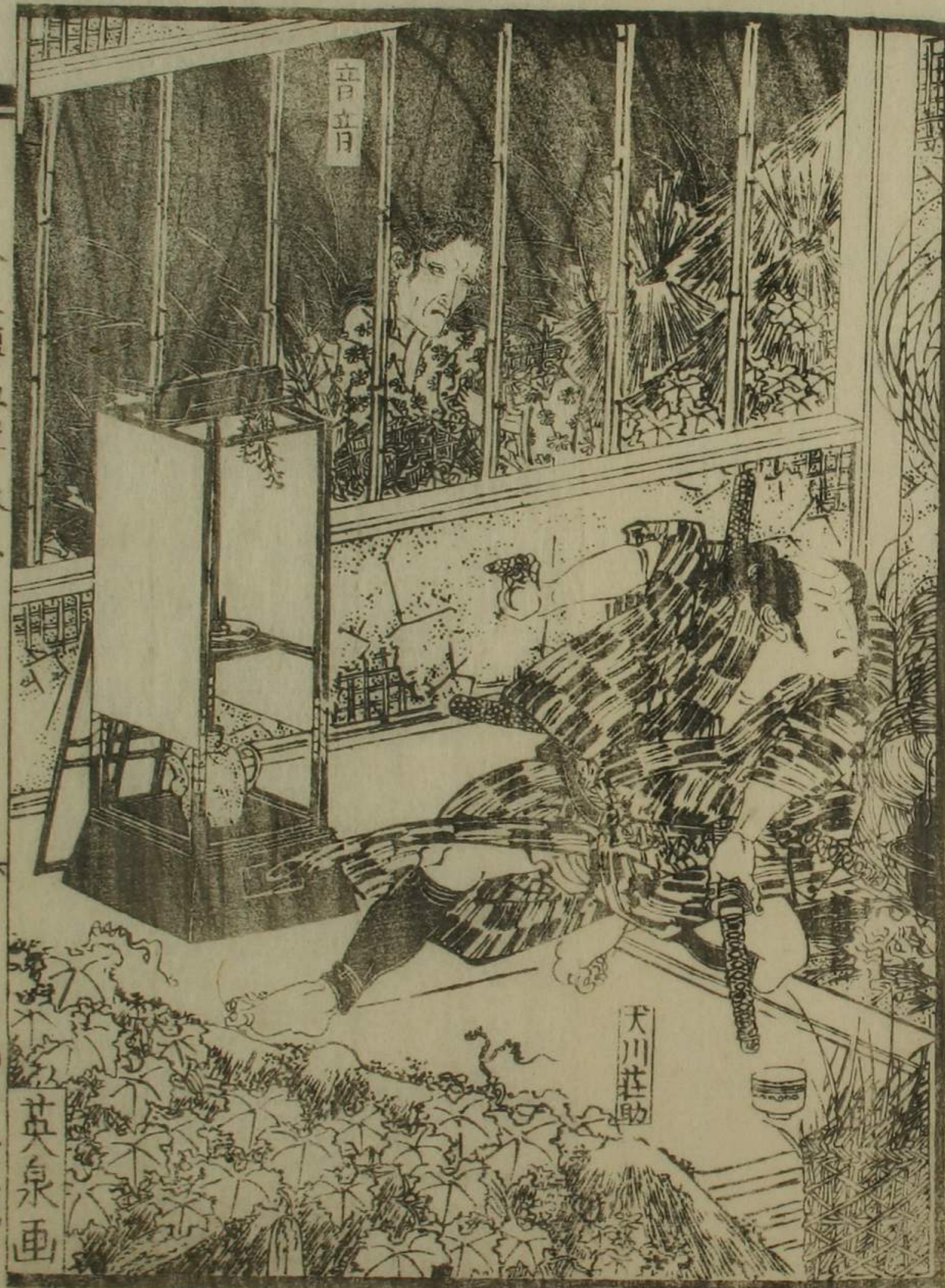
物調へんと多ども苗守おれをいふせんといふ礼ある所行おれども要時苗守して賜  
えやといふて莊助の微笑とていと易怒おれども去来不定の旅人は宿守の侍り  
あかりづば失る物のあんとおれも亦影護し今と急ぐとを推辞ハ音音も  
うら笑く寔ふいつとやうなうり錢財を有るものかうばう侍用心を志すれども寒家の  
後必まをハ何を厭ふ物のまへんこの山中ハ蚊も毒もやとハ又どあつ火更ゆく  
随ハ蚊ハ多うり彼処の刈草獲出しく地炕に熏て俟更只走一走り来ん且く  
頼こおれ侍れとといひうけとて外面へそが俣走り知れ侍を莊助これを目送り  
噫氣早行ある老女おを縦熟と路ありともこの暗夜ハ松も焼き何処ゆく  
邁くとやん物のいひさ進止山家子育一人と見え侍れ侍れ侍れ零落て侍某  
遠は片山里の賤婦ともありおけんいりぬとろの奥よりさまとむり侍れ侍れ  
頭へ文と叫びく寄来り蚊を頬に撲く噫け侍れ侍れ侍れ現殿ハ蚊をわし且燻二燻

えんぐ。くりをさ。とひ。お。なり。あ。り。め。や。ま。あ。る。ま。ま。さ。ら。あ。い。り。ひ。あ。り。  
 縁類の刈草の籠引よひ折る荒芽の山下風窓より颯と吹入れて燈火弗と  
 滅しう。莊助。これ。迷惑。く。悴。鬼。や。ある。と。撥。撈。れ。も。今。来。し。休。み。案。内。を。知。ら。ぬ。わ。  
 欲。き。物。は。も。當。ら。ぬ。あ。ら。ば。茶。碗。を。巻。倒。し。又。坊。車。は。跌。く。の。ほ。ら。く。困。り。と。果。然。又。  
 地。坑。の。縁。を。拵。廻。し。火。筋。を。取。り。撥。起。せ。置。む。り。此。埋。火。小。刈。草。野。う。被。せ。く。顔。  
 さ。入。れ。て。只。管。不。燒。著。ん。と。や。れ。も。未。枯。の。草。ま。う。れ。ば。吹。け。ど。吹。け。ど。早。火。燃。え。た。  
 あ。ら。頻。子。焦。燥。隨。火。吹。管。い。あ。ひ。や。と。く。何。懸。む。の。小。探。れ。ど。あ。も。の。所。に。當。  
 ら。ひ。び。せん。火。盡。く。闇。室。よ。も。と。又。た。く。呆。れ。て。を。り。さ。傍。程。は。犬。山。道。節。忠。與。甲。察。  
 田。文。の。地。蔵。の。茂。林。中。に。兩。箇。の。癖。者。前。後。あ。り。こ。が。携。る。仇。人。の。首。級。を。奪。ひ。  
 ど。ん。ど。ん。挑。り。時。あ。ら。ば。發。する。石。火。の。光。は。火。道。の。術。を。退。却。避。し。ハ。敵。を。怕。ら。ぬ。  
 大。事。の。前。の。小。事。ど。と。あ。ひ。入。り。て。戦。ひ。を。好。む。ふ。あり。く。あり。と。野。干。玉。の。闇。の。く。  
 鮮。慌。に。打。た。れ。ば。彼。者。人。が。肩。より。落。せ。その。兩。箇。の。祇。包。の。れ。彼。す。く。相。似。る。を。と。

取。違。へ。と。終。る。ぬ。あ。ら。ば。お。の。り。又。携。り。只。今。宿。所。へ。か。り。来。り。と。か。い。と。闇。音。責。  
 在。ら。ぬ。や。か。を。燈。火。を。ち。滅。し。と。曳。ひ。單。節。と。呼。立。れ。も。絶。く。回。答。を。せ。ぬ。め。あ。ら。  
 吹。火。あ。ら。進。入。る。案。内。知。る。白。屋。の。闇。に。迷。つ。を。徐。々。と。家。留。の。邊。の。破。戸。棚。兩。箇。の。  
 包。を。投。納。し。て。戸。を。引。關。く。何。處。通。秋。音。音。々。と。呼。び。地。坑。の。前。面。は。撥。撈。半。と。  
 彼。此。探。求。を。燧。箱。を。取。ん。と。あり。又。莊。助。の。道。節。が。ぬ。り。来。り。と。地。坑。の。中。に。亂。れ。  
 う。る。世。の。人。心。ハ。正。直。の。と。此。寡。し。く。奸。惡。の。徒。多。う。り。あ。ら。ど。の。老。女。が。真。実。し。げ。く。吾。は。  
 懸。く。知。り。邁。却。を。今。や。あ。ら。不。猜。せ。れ。ば。この。白。屋。ハ。盜。賊。の。宿。あり。あ。ら。ぬ。と。ん。ん。  
 甲。夜。の。被。茂。林。中。に。塚。を。祭。り。癖。者。が。栖。家。も。必。あ。ら。ぬ。と。あ。ら。ぬ。が。曩。は。指。平。が。  
 云。云。と。い。ひ。なん。も。亦。一。向。は。信。く。一。縱。と。の。言。不。偽。か。く。とも。都。も。鄙。も。一。郷。亦。同。名。の。あ。ら。  
 うれ。い。の。音。音。の。指。平。が。由。縁。の。目。の。小。あ。ら。ぬ。と。賊。の。妻。子。中。を。あ。ら。ぬ。り。果。して。あ。ら。ぬ。  
 是。れ。を。謀。り。く。外。は。平。一。ハ。そ。が。向。類。に。報。知。て。輒。く。害。せ。ん。と。を。か。ん。庶。莫。烏。合。の。山。賊。を。得。

外面は集やもつていふはせんさの迷り多くうきと塵芥くもいふと忍地腰小尋  
 思をいひ世も動くも舊の俣ふるを又起く息もたぬの時よも道節の間近人の在る  
 あつねバ燈箱を索るふ終は探りぬさう久地炕の縁を撥拵く。火筋を取て灰に  
 推立彼此類小撥起は埋火の嚮は莊助がうち被せりし川草よあつてつら移りやん  
 再び颯と吹入る熟鋭は夜風ふさふさのきく忽地燈と燃揚る天光よそめく面を對  
 して驚く道節訝る莊助齊く刀を撥取て等しく璫を突立ぬる左を如く  
 疾視する互の身構芳らば優る地炕を中小足場を掃りて且く透を窺ひつ。  
 道節苛急く擊んと進み天刀を抜きて莊助も必く声を被く早更あふ大山生と  
 呼れく道節あちをゆるを識る汝の誰を問へば莊助莞尔と笑ふこれ  
 和殿と過世ある大川莊助義任かれ告げたりの身あふ且その刃を退るはやといは  
 道節訝しげふとんがうらち領たぐを輕に納めともいふ此も由あせだ。

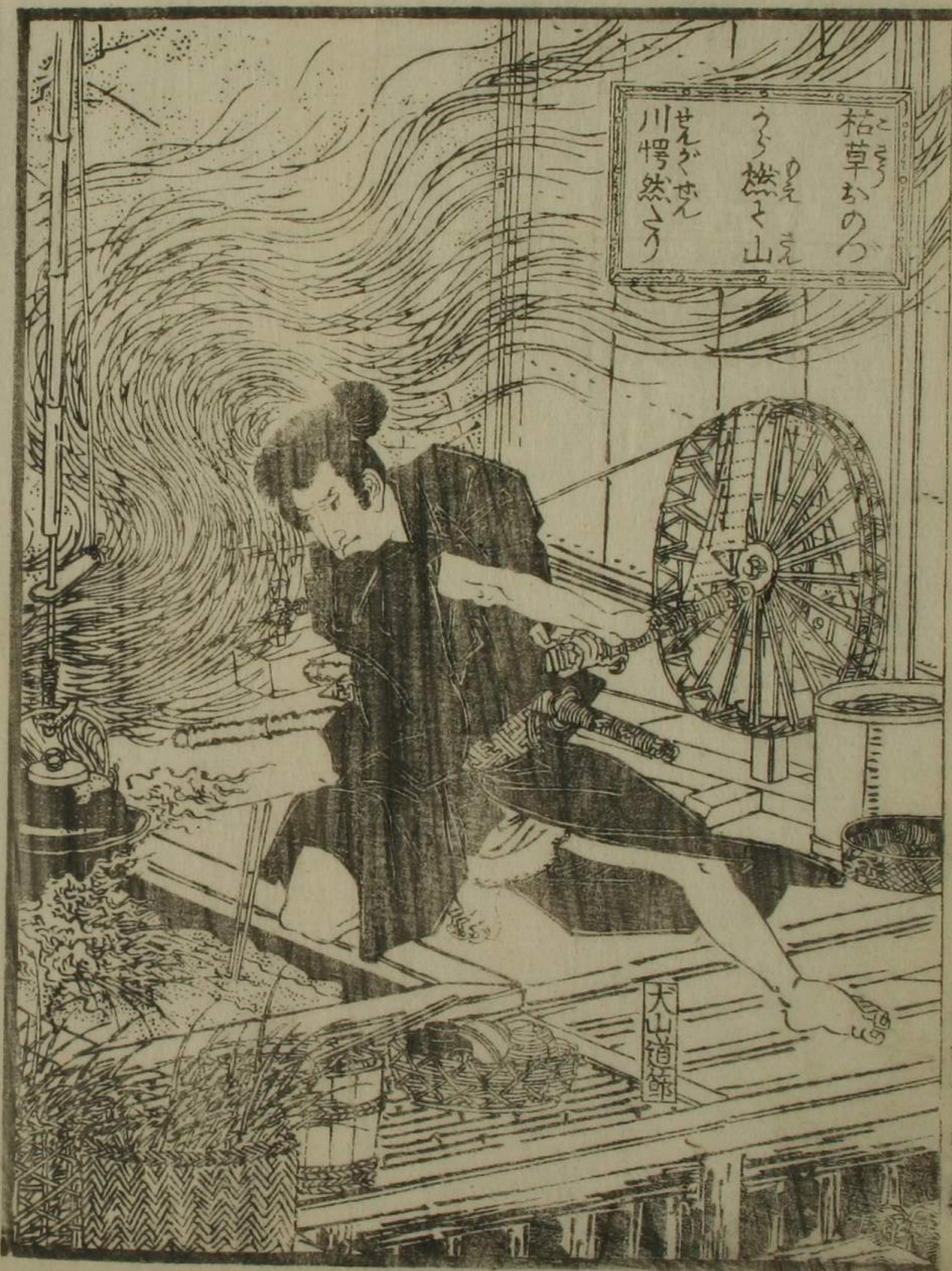
名告ちよもこれも亦聊おほえおほあはれいぬる六月十九日その日もかゝる最夜中比  
 圓塚山の邊ゆくといはば莊助膝立齊く節婦濱路を火葬の愁歎が竊  
 聞しを知らざりけん彼村雨の大刀をぬく君の讎言を謀らんとく立去らんとほ  
 程小刀の璫握留る名告被つとの太刀を句取らんともを振拂ひ丁と懸  
 たる刃の光り小句こちも透さば技合する句互の修煉虚々実々句一上二下と  
 砍結ぶ刀光餘りく腕へ句受へ浅瘡吹句砍込む肩尖句多ぶを瘤を劈れ  
 ころ句との瘡口あり飛散る小玉不思議はるがふ入りしを護身囊の細延て  
 あふ不がるる刀の鞘の句心もつてそが俣よ細引断く後よ知る囊の中あふさる  
 一顆の玉子鮮々と頭れるは忠義の義の字句との身の中よりやる玉あふ自  
 然と見ゆる忠義の忠の字句といふあふにへ讐言あふぬ仇あ有繫千金の身  
 を惜め火遁の術小句迹を埋めく往方をあふむ本意あかりし今宵の再



立月

天川莊助

英泉画



枯草おのつ  
うら燃と山  
せんがせん  
川愕然と

天山道節

會 田文の茂林ゆくまが祈念の妨せしははあはれや 彼舊塚を祭りし  
原来道節和主ありし状句その折間より入る推隔し何れぞ句をれを  
あはれ句 されもゆきた句とも亦後小あやうあらん句を何人あはれ  
心憎れは汝が骨法武藝勇力肌膚やば送小秘密を説明し合體同  
契を結ぶ萬卒を獲るやもあて憑りかえれども汝とわれと宿縁なし  
況過世をあるやあらんや然るを過世のありといふれ一切信くし妖言をこの  
期を延して油断を撃んと謀るやば何ふその極小来死やと詰る辭も  
果ぬ間より川草はとあやうやく燃盡し又さう小黒白もさうだりし六莊助を  
より立く縁故をたれ盡さる疑はるまうあれども送小正に證據ありとを  
此彼の玉のさやうだ和殿の身小恙あり形牡丹花の似や六是則和殿とわれと  
當小具姓の兄弟とて兄弟第一の証あ燈燭をととせば道節の身の中小恙

え、知れなく半信半疑の惑ひの鳥夜やも心當る地炕の縁小一裂の燂見あらず  
既中火の燃るとたれとたれと探取りの邊行く行燈小火を移しとて又あると  
音音ハ竊り多ふありあはれ去来不定の旅客ある莊助小苗守を任して田文の地蔵の  
茂林のくへ兩三町赴たれ 鬼小單節がかへる状とく且く途小立在わども前面あり  
来る續松の火光の絶るるえさるる素より物を買ん為し知るるあはれ  
其処あり躰くたり来る諸打戸の邊より裡面のやを窺ふ道節と莊助が向谷  
灰小ばえく驚あはれ左右や入らば歩を竊り近づく縁頼のあはれか茶垣小  
心をむけくあはれその言を笑くをり裡面あはれとも知れりく道節が今移る燈の  
火をえりする莊助やを膝を進めく喃大山ぬり和殿果して身の中牡丹は似る恙  
あはれが過世の兄弟あり憑りかえりあはれつふとと再向へ道節の頭を傾け眉を物類  
怪しむるを恙をいふしと知れらんれは生れあはれと左の肩に瘤あり六歳の



とれ故ありて一旦横死ありて不思議小蘇生せし頃あり瘤の上小痣のそまき形  
 牡丹の花小似りかくる暇の年を歴くいぬ月の子九百圓塚山の山より定和主瘤を  
 破りれと死聊もその痛楚を覺え流次の日肩を拵る人小瘤の愈て刃瘡の迹も  
 絶えぬをより原來との死を瘡口ありせむ玉のあふを不思議といふ餘りあり  
 ゆゑともそのゆゑこれ何ホの故かを悉せりて過世ありといひてやん因縁甚摩と  
 疑問へは莊助荒介とうち笑く千萬言を費はとも證かれば空語あり疑しくは  
 これをえぬやうといひけり諸肩祖だく背向ふありて背の痣を示さば道節ハ  
 違しく仍燈を引くまづつありてこれれは莊助も亦痣ありてこゝ身性の海よりあり右の  
 甲の下に至りて形牡丹の花小似り豫て鏡を照して見るとか痣小も異かぬは  
 小も大息つて奇あり奇ありと嘆息を當下莊助祖を飲め衣領の縫合も藏める  
 忠字跡の玉を取ゆこれに和殿の肩あり瘡口ありゆる物あり又某が秘藏の玉ハ

護身囊もち共ふかの折和殿の獲りけり文字を異なれこの玉と相似るを知り  
 てどわんへんえかんとて遠くよふ道節これを當み受つて軀も仍燈の灯小向  
 とんかうえつ感嘆のめく浅くは玉を腰着る印籠の中納めて項に掛ける  
 莊助が護身囊を返していぬる囊もこれの囊を披け世に未曾有の玉を  
 又臍帯を包紙小和殿の乳名誕生日及その玉を感得の緯の趣云々と書つけあり  
 一六あを必庸人ありと再會の日のあん状とてそが終膚小著るれどもゆる奇特のあ  
 べると一切多ひけりけり小瘡口ありゆる玉と悉くこれ彼相似れば宿因ありとせむ  
 られその故をあるざるの己が痣これありとて左の衣領を推放べく肩を頭へ示しに  
 られが莊助の欣然と護身囊を受納めり道節が痣を今小豫ての推量一点違ひは  
 心ぞ悦の膝ち鼓く和殿小これらの痣ありの圓塚山ゆく今妹小告めひしを  
 竊せり粗あることをぬれども今面りこれをん宿因空りゆるを了解せり原小

この玉これ人作の物を近世安房の里見の息女伏姫と云え一傳稀ある烈女之被姫  
 幼穉なりと云云云の事あり後行者の示現あり。この感得の珠數の除數の玉を  
 〇。毎つて長祿二年の秋伏姫富山小自殺の折との除數の八の玉の一道の白氣と共に八  
 方へ散れせし近曾同因の兩三友下總の行徳と里見の舊臣金碗入道、大坊  
 密使蛭崎十一郎亦も避座しその来歴を定ふ不知り。さればこれ自他の玉は伏姫  
 臨終の誓ひありその氣と共に散れし吾黨と共に人間に出現しる状件の  
 玉は仁義礼智忠信孝悌の文字をもちひつゝありと云ふこれをも因縁此  
 灼然なるを知る足れり又吾黨の身の中牡丹に似る痣あり八房の犬の毛色は  
 類りしもの形べ八房の犬の如く箇様々々との粟略を記し示して又は因縁  
 かくの玉はこれ等し痣ありとの相似る玉をも藏棄せしもの八名ありし  
 和殿を加えて六名の既不相あふとをめぐり送る三名も速く此の負ふ赤へ七類を

推し七知るべしとの抑和殿と云ふ外は同因果の豪傑は武藏國大塚の人民  
 大塚信乃成孝この和殿の令妹濱路節婦が結髪の郎ゆゑ孝字蹄を  
 玉をもちり次下總許我の浪人犬飼現八郎信道と信字蹄の玉をもちり  
 次下行徳ある市人の子大田小文吾悌頼こも悌字蹄の玉をもちり次下市川  
 里入山林房八が孤ある大江親兵衛仁こも仁字蹄の玉をもちり。かのくその母  
 痣ありく所を異なれどもその形は相同しよと推し此の出生の地も父  
 母もこのく同にかたといふとも過世の兄弟あり各々自然に犬をもち信字蹄  
 せし欽奇と云ふ。よもかたは多し被姫入を吾黨の過世の母と祭るも  
 其を証すると云ふは同因の八士具足共侶安房へ参りて里見殿不  
 仕まつる。これの原は返るの義なり。かゝる因果浅くねども宿業の係  
 所欽薄命なるぬめものか今よかのく安堵されば大塚成孝を伯母夫

婦子謀られく村雨の天刀を喪ひを知られしと辭我へ事りてあひひりて罪をたがふ  
 との折天飼信道と組繫りし船は陥りしをら行徳小漂泊して大田父子小扶らる  
 且山林房八夫婦が身を殺してやうをくふ再度の危窮を釋ゆり某父彼夜  
 さうあつて主の讐言を當座小入敷番やと讐言の奸黨は誣られて既死刑に  
 臨み折天塚大飼大田の三雄法場を却り奸黨を撃果して某を極ひり共  
 侶小走る程小戸田河のほとりゆく追ひの戒兵は追詰られ渡りくく死を極め小  
 神宮の猪平しういふ漁夫の扶助ありて船を獲て敵を避り只彼猪平のこぞ  
 そが親族を二個の俠客力二尺八と叫ぶとの蓋葎の中より頭れゆく奮闘突  
 戦花々々力二郎水の中ゆく追ひの大將丁田町進を撃つとつ尺八を前面の岸より渡  
 さんとせし敵を柱く頼り小挑戦小う吾黨逃すこれをえく再び前面へ返り渡  
 しく相助けんとて船を招く猪平一切け引を豫てあり世をえりけん船を論じ

身も共侶小入水して亡にたりこれより某小いねわく其処を立去りぬ折り黄昏をたが  
 彼面俠者が存亡を定たに果さるも形ありかびゆりて死路を求めて走りくると  
 告るを音音の竊生々且驚死且怪之舊夫の猪平ぬ一甲夜小平くも門は立あひりハ  
 究竟かんとし知のたつれゆり拒之要時も容さるし神をぬ身を悔し先をたが  
 今さう小裡面は入るおも入りのぬ一あり隔の柴垣は携りく印り伏沈む裡面は道節  
 餘念なく縛の趣つらうとちあて狼を改め現未曾有の奇談なり縦宿因なりとい  
 ともいられも稀世の豪傑ある其眼力明かぬが村雨の天刀を返さば悉く和殿と讐  
 敵のあひをかせし面をさす彼猪平のまが父小舊く仕りもの小あく當時の姓名を燒雪  
 世四郎といひしとぞ渠もが生れ比如此々々のさう追退けりぬぬが面影は  
 認めぬが神宮河原小さるものぬあさるをやくはすりた又この家のあさる音音ハ昔

世四郎と情由ありて力二尺八を産む。亦如此々々の議ありて音音ハそが伏見  
 ありて乳母ありてありて子共ハ母ヲ慕く其ハ仕へてこれハ世四郎の猶平カニ  
 尺八が父也ともえありぬ人ハも竊取て父子ありてこれハ世四郎の猶平カニ  
 此の世をどうかして戸田河子投て秋寔ハ不便の最期ハ又彼力二尺八ハ追ひ大勢を  
 防苗を四六士を延せハ謂あると云ふ其豫之君父の仇を相撃んと欲せハ腹  
 心の郎黨の残るハ僅ハ渠ハの俱ハ忠義の志を逞ハ壯俊也れも彼張良を相  
 扶けハ秦始皇の車を摧れハ蒼海公也及及之ハ此の三四の輔弼を獲て大  
 義を舒んと云ハハ力二尺八ハ武藏も送ハ汝ハ兄弟ありて合して世の豪傑と  
 云ハハ實情をゆく厚く交りての胃臆を深く探りて絳の便宜をゆさんハ  
 躬方ハ引入れ命せとあり。これハ彼兄弟ハ離別の父ハ力を寓之と云ハ  
 識ハ眼ハ四六士の為中ハ志を盡せハ和殿只ハ此ハ和殿只ハ此ハ和殿只ハ此ハ

宿りありハ餘の三六士ハ此ハ和殿と問ハ莊助領之と云ハ其ハ吾儕也  
 戸田河原の再厄を脱れて俱ハ三四日走程ハ明魏の山中ハ某漫ハ茶店  
 あり。遠目鏡をゆく直下せハ和殿ハ似ハ一個の武士麓をわハありハ何ハ  
 人ハありハ和殿ハ三六士ハ云云と報知して皆遠ハ下山ハ其地ハありハ被  
 此ハ和殿ハ白井の城ハ程遠ハ如此ハ々の里ハ通りハ此ハ里ハ野奔  
 走ハ云云の処ハ瘠者あり帰城の折ハ窺ハく扇谷殿ハ犯ハり否撃ハリハ管領  
 あり。御内の某甲ハ和殿ハ頻ハ罵リ駭ハルハ吾黨もハ驚ハルハ其ハ果ハて実  
 あり。和殿ハ怒ハ復セハ和んてこの処ハ赴ハく絳の虚実ハありハ其ハ共侶ハ走  
 程ハ前面ハ血刀ハ引提テ走り勢ハ黄昏ハれば面影ハ定ハらんハ是ハ何ハ間ハ  
 俺們ハ四ハ立ハる間ハ紛れ入り走脱ハ往方ハありハ此ハ吾黨ハあり  
 あり。城ハこの追ハる士ハ側杖撃ハて己ハを戦ハ程ハ敵ハ新隊ハ加リハ

よく難義に及びしに竹藪の中より関を作り頻く敵を射して援をあたふ。終小重圓を殺脱し異途同志を走り日暮れ月へ雲入りて東西をさるる。某ひる後れうかろ田文の地藏堂且く足をしるや和殿が塚を祭り益賊あんとあひく柱終小撃走ゆし其処よりあへるすいへ彼猪平が犬塚に詭書状ありてこの山の麓を老女音音へ與ひて豫て笑ひをよめりて大塚の二友を其処小宿投るといふをそのてとてさうさうの向は彼三大士の墓をあらあて候ひ必逢んと多バ駈てやれりいとしをわいの老女物買ひゆくとく宙守を仕せりり刺風燈火をうち滅される折れ和殿かたりあふれば疑心忽地暗鬼を生くとも亦賊あつたきあひ惑ゆる辨をさうを燃揚る火のあふるせの鳥夜不綱を削るまで送小傷くともあらん老うと膽むふ心の限りとて盡其道節これさうあゆむと先片向く頭を掛親地を信一殊れを疑ふ世の人情といふのうとこれ宿因のあを所さかりあつたなり某の

いぬ比圓塚山を立ちきく鎌倉は起けの讐の動静を窺ひ小扇谷定正お云云のうゆあり工野百井へ赴く風向大々をされば竊跡を跟くまの乳母音音が宿所を隠れて又便宜を窺へ定正のあり戸澤山は村倉を告あゆふ夫役を死しれりここ究竟の折こと多とも音音あさき意中の機密を告しく彼狩倉は程遠くぬ明巍山の海をふらめ歸城の時刻を知らし和殿は遠目鏡をえられしその折中をあえれを白井のあはれり列原は俣つてこの村雨の大雨をりてあひの道に謀り近つた仇人管領定正を衝倒し組伏せて夫庭は頭を搔落せふ豈むらんや敵も亦豫くその準備ありそが撃捕する定正を越後野一郎遠安といふものもあれども速安池袋の戦ひは倍盛朝臣は鎧を纏るあゆむ若の讐をば聊極憤を慰ゆる是より敵を擇むと多く當ふ任と撃散せし小敵の大將巨田助支教蔭より士卒を進ゆく前後は扱て撃んとし陣成は

わるく且戦ひ且走るとも黄昏の折もく前面より来る旅人の間へ分て立給ふ頃走  
 りて入る追来る敵へあつて造らざる関の聲を彼竹叢の邊で烈に戦ひあつ  
 たり。如く當下某の如く敵八件の行客を示す助大刀と認認之捕籠之撃つ人輝の危  
 窮を彼小賣く脱れ去る。本意を人殺しと身利見あり。空平共侶死を  
 次をれば遠く舊の処へ走りの竊小竹叢の潜り入りて鯨波を揚箭を射被け  
 謀りて敵を驚く。暗小和殿を扱ひゆり。程は敵退却日暮れて舊の列翰の  
 因りて赴死量小とて人投捨る速安か首級を揚て包を腰に附打つ。父の仇  
 父の仇龍門三室平を撃捕く。首級を腰に著敵の伏兵両天を海も漏れ撃  
 果し。田文の地藏堂の邊に今茲四月十三日と亡君亡父の為に音音が建方卒都  
 婆おれが仇人の首級を贈贈んとて彼茂林に立入り。小忽地和殿は驚され。祭りも  
 果ど兩級之首と又携さく。その下りて緋の趣を告人とあひ。音音は在りて再び

和殿の驚き。義勇稀多。五犬士の乗歴を安く。某もその人。之れ宿  
 因を解せ。杖びこれおとめ。あつてのやせ。豫てあり。夢中も知る。とわ。六圓  
 塚山中この村雨を和殿小遊与へ。小雙言を謀る。小究竟物を獲。うとのと  
 多。女弟濱路が云云。といひ。末期の所望を許さ。且くも犬塚生を苦。し。悔  
 けれ。あつた。おれ。の。犬。川。ぬ。某。が。彼。夜。を。女。弟。の。仇。人。を。撃。つ。は。大。刀。の。往。方。も。知。り。か。こ  
 り。ん。小。不。思。議。なる。事。入。り。身。も。宿。因。の。致。を。所。以。離。合。得。失。定。は。時。あり。犬。士。の。隊。の  
 今。ど。入。る。犬。塚。へ。牽。出。物。の。大。刀。を。何。あ。ん。ん。識。ら。う。時。も。四。犬。士。某。の  
 代。り。大。敵。と。突。戦。し。某。の。又。四。彦。の。為。小。途。を。返。し。合。り。野。の。敵。を。撃。退。け。る。進。退  
 謀。合。せ。如。く。俱。小。危。窮。を。脱。れ。ハ。自。然。小。協。小。同。氣。の。感。念。嗚。呼。奇。あ。う。妙。あり。り。こ  
 既往報る長譚。小莊助も亦感嘆して某もあつ。又唯けの。値。偶。の。と。か。く。と。量。小  
 和殿と某とゆ。分。く。玉。を。相。換。く。と。の。玉。の。め。れ。な。利。あり。某。の。大。塚。を。被。奸。黨。に。誣

うれしき禁獄せられ日心地死ねば一時玉を口含め快然と云ふ  
 かくその玉を口含め身を拵れば杖倉忽地愈々且その玉も某が玉の誓を敷く  
 知れ和殿と易る玉の忠字跡の誼不稱へり和殿へ亦尋ねり村雨の天刀を獲て今大塚  
 返えんこれ玉の義字跡不稱へり忠義を兼義中忠ありかれ大士と云ふ人の異姓  
 あり骨肉の如く玉の字跡不稱へりその感應異なりやあ亦自然の妙契之驪  
 べしと稱へ俱不感嘆を道節あはれ和殿と某が骨髄を送り書しゆれども  
 犬塚大飼大田外へ赴け秋心かたけこの地に究る邊鄙あり人煙少山路多  
 且定正が米地多長速小疲勞と云ふ再び不測の禍あり尤危なりわづら  
 あり音音ハの還りて媳婦共宿在りこれ亦故ありげり輝の趣面  
 向きく受ども渠ホを俟暇か誘ふ彼此を隈なく索て三士小逢んとくといそ  
 が立ちて両刀を腰に跨り村雨の大刀を携へて遠く身を起せ共莊助この後よ

後めく刀を把て共侶不ゆるんは程小音音ハ慌忙なくや俟更と呼笛つ小柴  
 垣の蔭より目有涙を流し絞り媼が猛呼笛やを和子も大川めいん心  
 ぬくくがほしめめとそをくあかへるこれ彼のん暗譚を迷なく安らり侍り  
 かん群の衷を打ちとく今も彼処に侍りあはるやも君父の誓言を二人わが誓  
 歎いと秋媼が秋びとびと世の夜入達と宿因のをりあて交を結せあはる  
 幸ひあり且け重も悪むゆひ子共のうも浪史をて聊慰め侍り就て怪  
 り。お記のよのぬお單節もあはれねむるべなりこれれども今とてい  
 殺克く恙わたり追捕の沙汰へおまこの地へも下知せし深夜の天刀月を  
 この曉あはれせんとて道節領なく乳母の母不等力二尺八寸がりおもも豫て  
 機密を告ぐる言の洩易れををれとてお三士士の往方を索て伴ひたりと緩

ちりふととあふふせんとし。又莊助も共佐小原を一樹の蔭に憩るも一河の流を  
 渡りも縁をぬぐの俱わく。況宿因浅くぬ大士の影と形の如し。途は不測の事  
 ありとも相資けて無異を計り。自分より要れとて音を音言んて。懸りたる舟  
 犬川に。かむく和子のうへを委ひ。他も。かた誠心の現主を。松明を。せ  
 る。あつと。と。道節頭を。掉く。否。燈火を。携て。六敵の。目標。を。や。や。見。鳥。夜。を。  
 よ。れ。と。莊。助。ふ。う。ち。つ。れ。を。て。せ。を。音。音。の。要。時。目。送。り。と。折。戸。引。蓋。裡。面。は。入。る。心。  
 ひ。の。不。疑。ひ。を。解。く。り。の。め。た。物。也。單。節。が。飯。ぬ。彼。松。原。の。戦。ひ。不。邁。あ。り。走。り  
 後。れ。流。箭。不。疲。を。負。や。り。飲。さ。り。冷。い。馬。を。喪。ひ。飲。雜。兵。不。乱。妨。せ。し。を。還。る。路。の  
 ち。の。飲。を。運。地。の。何。の。方。ま。れ。平。事。あ。ら。う。心。か。さ。る。は。是。の。と。な。る。二。個。の。子。共  
 戸。田。河。之。彼。大。敵。を。殺。拂。ひ。飲。多。不。就。之。悔。ひ。世。不。加。死。人。と。知。ら。れ。七。強。顔。く。邁  
 せ。稽。平。ぬ。健。氣。多。る。最。期。を。家。廟。に。燈。進。を。南。を。阿。弥。陀。佛。と。念。り。く。

身を起こえとほり。外面は咳けと挑燈片。折戸狭しと庭門あり。燒法々々と  
 呼びて。事。人。を。誰。と。せ。し。れ。先。平。八。莊。役。根。五。平。樵。夫。丁。六。顯。介。を。ね。く。縁。頼。お。て  
 進。近。つ。た。燒。法。を。や。り。し。れ。う。挟。夜。深。く。小。も。睡。ら。ぬ。草。木。も。定。る。夜。を。危。と。走。り  
 廻。り。別。義。ま。あ。り。白。井。の。城。あり。火。急。の。見。下。知。等。前。か。や。あ。い。と。い。ひ。か。懸。て。懐。より  
 下。知。状。を。と。り。せ。六。顯。介。の。ち。ち。挑。燈。を。う。あ。せ。り。當。下。根。五。平。恭。一。く。件。の。状。を  
 う。物。被。け。先。之。煉。馬。倍。盛。が。残。黨。多。く。大。山。道。節。忠。與。と。い。の。あり。竊。は。蟻。娘。の。斧。を  
 舉。ぐ。逆。謀。を。逞。く。蚊。蚋。山。を。負。か。の。力。を。と。て。怨。を。報。ん。と。稱。を。り。て。巨。田。新。六。郎。亦。逆  
 密。説。を。奉。り。今。日。追。捕。せ。し。と。以。て。も。窮。龍。還。之。猫。を。啖。と。逃。亡。て。往。方。を。知。ら。ぬ。の。賊  
 亨。年。三。三。骨。體。高。く。色。白。く。月。額。の。迹。延。り。倘。か。の。如。れ。の。あ。く。六。速。報。稟。せ。ま  
 搦。捕。之。進。ら。せ。か。賞。祿。ハ。宜。功。ハ。依。る。べ。一。猶。同。惡。の。れ。四。五。人。あり。姓。名。を。詳。か。ら。



懐へ巻納め焼酒よありぬれ秋和主ハ他郷の人なりと仁田の背人が紹介りと去歳の  
 夏より村の空房を購求す之寡居の親子三息子ハ他國ありといふ女子  
 たりて之を癖者を捕捕とぬれどもとありふらうとぬれぬ人を捕  
 ぬれと彼隱宅を知るとありふらうと吾侪ハ報也賞禄ハ勿論等分を苦しむる  
 莊役之瘦村のかかき六鄰といへども三四町家数少く道遠り非常のなれらん秋と  
 保伍兩名を馳催して暗夜を彼此を敲起してあが打納倦勞れぬものなり  
 たりといひて晋をうち敲けバ音音ハ笑々といふ微笑をみよる疲勞をいひん丁六の  
 顯介阿も尻をうけて休ひて焚つて茶を進むと根五平はあを茶  
 水も欲から然らバ退えとて兩個の樵夫をよめんとて終走り去るなり

第四十八回

駄馬暗し兩夫妻を導く  
 兄弟悲て二老親を全せ

おとね 音音ハ障子引闔く心づつ息ののど苦地曾をのり掛下しと安くぬ追捕の  
 沙汰ハ豫てり覚期をしも下知状のあへもあつ届けを知らを漫々といふ和子  
 心をなれりとて追掛くせん西吹東吹はつる何処をさうと年物ののどち  
 過ゆく老が身代り子共の共侶の家の中あはれる時又見せしむる女死なると女媳婦  
 えぬるもかへぬるをうくとあやうふ形如世のさまひ絶ぬ苦勞を  
 身如の小憂とも丑の時の鐘を鐺々と報る所寂滅為樂の響を誰か夢を  
 破らん更け隨小膚寒地風がささく櫓近く幽け兒馬の鈴の音足撫は拍  
 子をさうしるをれらあぬるとをりり音音ハ耳を傾けくさけ女子の合唄ハ馬追ハ  
 勇むる小屋曲孺りく唱詩優いハ荒芽山月とわらふ曇る夜の翌を侯ト  
 袖の雨ふる郷遠くひとりぬるわら秋の落寐ごと風の便ふを引妹侯と  
 あつ井よ近き小松原引とて外小秋の日せし丸ある夢のさあつ覚れば舊の



山崎三車巻五

十七

山崎三車巻五



秋の野火の  
虫中をゆる  
志の娘女の  
ゆるゆるる  
あひあひん  
ほこおま

山崎三車巻五

山崎三車巻五

水葦の残の雪と書せん。引と詩ひ連々八重律宿の檐下小近つたり。さ程小  
 曳又の病疲れ行客三人を合鞍小乗し馬を牽よる。單節ハとぐ  
 行笊笊の両箇を二荷は背負らる。右ハ小蕉火をゆり輝し先小進を遽しく  
 鳴子月落ゆく諸打戸を左ハ開け声高や小阿姑御よ目今炊を伴ふ  
 還りゆり曳よむ。さか。い。も。睡らでをのさ状と呼子あ。姉妹が笊笊を  
 縁頼小解却ち馬を檐下小牽居れば音音ハ慌忙に開き障子の外面へ行  
 燈推向け出迎へる。彼ハ氣色ハ顔れをどてあ。か。ち。運。り。一。恙。死。良。足。を。ハ  
 寢るものぞ。睡ら。死。飢。も。疲。勞。も。を。怪。我。せん。中。の。死。の。と。あ。そ。あ  
 足を濯れ。と。い。ひ。子。く。又。遽。く。庖。福。よ。い。ぬ。だ。く。准。備。の。温。湯。を。小。桶。小。汲。り。  
 引提く縁頼へ。と。ま。の。盥。小。揚。し。を。程。小。曳。の。單。節。ハ。彼。兩。個。の。行。客。を  
 馬より下しく。あ。そ。の。足。を。濯。せ。く。馬。下。洗。し。く。厩。小。牽。入。き。草。鞋。細。解。く。同。胞。も

送代不足の汚を洗ひ流きを俟ねる音音ハ件の行客ホケ対面向て縁頼小  
 尻の掛し背姿をどんか。ん。つ。討。し。小。曳。が。背。を。爪。敲。し。之。彼。ハ。何。処。の。人。と。あ  
 やらん。馬。を。貸。し。行。客。わ。ら。白。井。あり。嚴。然。下。知。あり。左。右。多。く。苗。め  
 かくる。と。い。ひ。今。お。も。道。節。が。四。犬。士。を。ぬ。く。か。り。来。バ。絆。の。妨。多。く。と。あ。の。う。り。を  
 ぬ。ど。あ。ぬ。曳。ハ。回。れ。後。方。を。さ。り。真。夜。中。過。く。行。客。連。小。馬。之。貸。て。伴。ひ  
 俗。を。討。し。く。あ。ひ。あ。り。け。小。曠。昏。小。白。井。の。殿。の。帰。城。の。途。不。慮。の  
 騷。動。情。由。ハ。定。く。小。ぬ。あ。ね。も。猛。軍。兵。ち。あ。ら。と。何。の。里。も。人。群。打。く。  
 入。さ。小。路。を。去。あ。へ。馬。ハ。駭。死。人。の。壓。れ。く。芝。堂。も。死。折。り。彼。兩。個。の。行。客。連  
 且。う。が。後。あり。来。ぬ。ひ。絆。の。難。義。を。さ。り。ひ。く。噫。痛。お。女。馬。士。吾。儕。が。後。小  
 跟。之。来。よ。と。い。ひ。あ。ら。先。小。立。つ。稠。人。を。推。分。撥。遣。り。辛。く。路。を。引。死  
 かの。あ。ん。稍。の。里。を。邁。脱。く。又。と。の。先。も。路。去。あ。へ。あ。れ。ど。も。彼。二。が。この。あ。小





よまの涙の涙小衫を潤したる且一々母音音の鼻うらみかきとをカニ郎尺も志忘れ歎  
彼ハ曳いひと單節之婚姻の次の日の豊嶋煉馬の死滅亡物負つての俺も七憂ハ  
漏れぬ習ひて親の子共の安否を尋ねて妻ハ夫より別れて信絶一年半され込込  
隠宅に告げやうもあつた六兄も身も妹も夫婦不思漢ふけ途で環會する  
甲斐もなく送ら面を送れても義士と貞女の誠心を皇天憐れぬひん。ちちと途の艱難  
病苦と此彼救ひ濟れ宿所不伴の還り六寔小場は情縁と去歲の夏よりこの  
山里小住不楽より一憂苦辛勞のいそぎを察し然るを兩個の媳同胞が辱をせ  
敷て朝より夕まで慰めよよ小孝順の誠めて細煙をまきりき曳ハ單節が微り  
せ憂小の勝ぬらるひらをいそぎに全を存余は侍稀る貞女と譽言て慰め  
受つ。やま曳まよ今さら小何を敷くことあらん單節も涙を疾飲めて良  
人のいふまじやとむら敷待と親とら救ひ言葉小頭で松の標を懸け死枯る

枝中も花熄のさく夜の丁子頭今宵の祥状とあひる曳ハ單節ハ行燈の  
背のうさりやうな小良人の母より小近の夫婦ハ二世の縁とら又とる宵限り  
別れありあつたとのをひて心ハ霎時に変りほどかり果る面影を認送れられ  
認送れと結びも曳ハ草枕旅ゆ他一人とのをひつた外々あつたのひりとの恥しく  
悔あつたりと共信小勸解と夜宵一目を拭き良歡交あつたりで言語の暮れ試  
一句小龍の良人ハこれとるよりカニ郎おひやう榮枯得夫定めかく軍敗れて  
家を喪ひ狩場の野鷄も似れどもいそぎ妻を忘るべハ只その契りの短れ故に面  
送りハをさあつた。これの面目を物々むら音國の秋胡とらひひりハの妻を  
娶りてい程かく他郷に赴地遊學と七年を歴くかへる小東林の女子ハ懸想ハ  
その妻ありしを知りてと車を駐め黄金を扱く調戯ハ色好まある浮りりこの  
惑ひの今宵の秋胡夫婦も似えくもわがる小何ぞ恥るとあつた驢之と



馳散して頗り小重圍を突也ども射方も續く兵がれは弓折を契ひ死に終ふ  
 陣歿を命ひたり。あつても郎公道節をハ浅瘡が不負ひあつて勝も衆も大敵を殺  
 散し馳脱て雜司谷まで落れり。馬の左右も後ゆる某ホをえ久り之をれカ三郎  
 又八郎もうけあつて既も君父を敵に撃つてこれ亦命を惜む不わつて組人と敵に  
 始あつて名も死に初武者を十騎七騎討捕之死するとも臣子の本意とほりて死ハ  
 易く考く生ハ難しけの命を且く延く仇人定正を狙撃バ忠孝俱も全く是ハ今ありて  
 汝もも志をこぞと之竊も射方を招り集めよあつても鳥合の徒黨もなれがのり  
 還るも偏易うり五指のつかはるゝ彈あり一巻もあつては或ハ一旦の利も傾き或ハ輕方  
 して虚名を貪る鴻許の射方ありても要や願ふの豪傑兩三輩の資を獲ばり足り  
 又汝も兄弟あつて合して智も武藏を去るに深く隠れ遠く謀りて世の豪傑と  
 兄弟あつて薄く交り竊も撈りて説く射方も勸め容れよその餘のゆひ云云と叮嚀も示

されて身の暇を賜する主命道理不稱せ也ハ一議も及ぶを兼伏あつて惜む別々の愛  
 哀苦駒を早や落れ背影のえぬるまで目送る程小日暮れ武藏ハ生れ一國  
 あれども落人となりしう胡路小宿を投り難うり神宮河原も世を避る離別の父の  
 今の名え年来傳せられども有繫も主君小憚りて去歲までその安否を問は對面  
 せりやあれどもかす時をを見参して竊も資を借らんとて潜ひて彼処へ赴きて下や  
 父子の名告をうけ父の胸中を探るし世を避け也ど今もあつて舊恩を忘れぬ館の  
 滅亡故主の戦歿を歎かれ忠信の言の葉切通れ現身の過を一点も飾りて悍く  
 潔然心の底ハ頭れうかてそを且が同胞の親ありけれと慙しく辱さふ感涙を拭へも  
 竭ぬ自然の恩愛初對面より二聲の隔る身を父も任して神宮の宿所も潜ひて  
 たり母を託るを離別の父も身を寓する僻みどとて怒らせぬとありたり  
 あつても彼も此も私あつて忠義の為ハ親疎を主をわりハ孝を以て猜忌を感



ぬ不逞なれが剛淋薄る吾妹子は母を任ふこの山里小落留をあふりてひ小  
 去ちまふ父の灰小傳せりて之曩小密語あひらども機密の漏るとりて遠慮之  
 信せし知りて物をあつらふ不孝の罪いと重りりる程小まふ父と密を相諱て  
 或他郷の浮浪人或近國の俠客をど彼此とかく交りて之竊小意中不擇お  
 どもこれぞとあふりもか。あふり大塚の郷の浪人犬塚といふ壯士は父と面  
 識る是益世の豪傑之唯彼犬塚のまかひてその友人小犬飼犬田犬川を呼  
 るめ智勇のまもあつらひ優さをこの人々を躬方招く大う成のんとま  
 父の識量せりてその圖を技を彼豪傑小下總より父小舟を寄れ大の  
 早くも譚ひ寄るそのまひくま母書状を届けあられそ一通を季のあひ緯の  
 あらひ彼人々をこの処へ立寄して御郎公と交りて結見為り小あつら果茂  
 して彼人々は大厄ありあつら危窮を極つる志を示す不足らばと大人の先見その由あれば

某小も亦その議ありて父子三人豫てまう戸田河の東の岸小舟を浮り陸伏し彼  
 犬塚小舟が敵を連れてまを俵小果して違ひを設けりあられ大人小舟の人々を船に  
 乗し之前面の岸へ漕渡りま程小某小舟の敵を柱を陣番下田といふあつら水  
 中へ襲捕り有斯なれと敵のあつら勢を憑て退くを追ひ返す戦小程小大  
 塚の城ありま加勢の兵五六十人簇々と推寄る連放る鳥銃小兄の高脛を打破れ  
 弟左の肘を撃れて進退遠小合期せしれり先小彼此へ負ゆる浅残の衣所へ係  
 れはまをまを面も振りま水際の敵を殺崩してその宵闇は紛々同胞齊一水中へ  
 跳り入り底を潜りて前面の岸へ洩れ著あ斯丹精を盡しる大塚小舟往方ま  
 見届げざん小本意知れり且郎公の鎌倉へ竊り赴れあつら豫てその報ありれば  
 今項の彼処あり尚上野へ赴れ荒茅山邊の隠宅小ありまは日ありあ見事の序小  
 母の安否を訊く吾妹子小も慰めあつら血を吸ひ残小布を巻れ同胞送小



二十五

○山本堂藏

英泉画



山本堂

忠  
義  
胆  
既  
往  
を  
話  
説  
そ

力二部

ウク

八犬傳五輯卷五

山本堂藏





歎けも對の紅淚悲泣のいひ合ふほど言の葉の揃ふ誠ぞ哀れも恩愛節操量の  
 情致不泣立ちけ力二郎尺八もまた又たなく嘆息あるの二個の妻の泣沈しを  
 再び此もえんく兄の弟小目を注して母小對ひく稟はせう豊は單節が切を  
 諫言それをもあま母大人の一言をり貫死ゆか兒慈愛の身小入る名残の惜し  
 けれどもともかとも某ホの永くこの地小苗りが一就之又情願ありそんが父の  
 父神宮河原は漁瓶と細火煙を立つも又異妻を娶りあつて況故主の大恩を  
 報ん為自身を捨て彼犬塚ホの四犬士を斬くこの地へ引着のひその績莫大か  
 ぞあまむその身の栄利をりて戸田河は投めゆに義烈任侠両か想像ふ不  
 腸を射るあふいと良くと痛おはさかぬかれば此度の功をりて主君の勤  
 當省免わが世間廣く某ホの父と唱へ子と呼れ母も正に夫婦ふあまを  
 郎公小はえあけ執成く素懐を遂さめらば一家の洪福この上か人の子とて父

かへこれ禽獸小異あびらち歎く申のおまりの某ホが年来の心の憂ひをこの  
 みの賢察仰ぎまこと膝を進む右ひらり母の氣色を候ふ程に秋の夜  
 かく尚長く坐小響く遠山寺の五更の鐘を吹えたる音音へ媳婦と子共此  
 情願忠貞節義小感嘆しく涙頻りふとかり落さる袖小隠しく貌を改め  
 けり妻子の恩愛適んとつた良人の勇敢母の適けとも苗れとも今さう是非此  
 判断か又一同胞が愁訴の趣理りあつてとらひどもとが口親執継ていそ  
 和子小稟さる死を恥しけりあま昔の不義淫奔の世四郎との罪重く  
 吾俯が科の輕けあつて後人小勝と乳房小愛く和子の乳母小知りあつり  
 打り主君の裁判道理小違はせりともあつてこれを道理小違はれそ又奈何と  
 推てふ奴婢密通の子共畜産小比さるとい本文小扱はせぬ情郎の只何となく  
 身の暇を賜りて吾俯を苗めひかり譬は宿の畜猫が他一牡猫と尾切つ産



